

序 論

- 私たちは、先週、「使命に生きる」ことについて学んだ。
- まず、クリスチャンとは、イエス様の十字架と復活を通して神様に「選ばれた」人々である。
- しかし、それには、目的があった。その目的とは、イエス様が、私たちを任命される地(それは、家庭、学校、職場、或いは、ある地方コミュニティーであるかもしれない)、とにかく人がいるところに信徒として、牧師として、宣教師として・・・)に行き、実を結ぶことである。
- ここで言う実とは、キリストに似る者となるための御霊の実、品性の実であり、具体的には、ガラテヤ5章22-23節に記されている、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制である。
- しかし、この実には、もう一つの意味がある。それは、イエス様が、選ばれた私たちを通して、もう一人の選ばれた人、クリスチャンを産み出すという意味である。
- それは端的に言うなら、「伝道の実」である。
- ある聖徒は、こう言った。「救われたのは、救うためである」と。その意味で、伝道することは、私たちクリスチャンの使命である。
- それは、イエス様の地上での弟子たちに対する最後の遺言的メッセージの中でも、ハッキリと表されている。即ちイエス様は言われた：
 1. 「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい」(マルコ16章15節)、
 2. また、「聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤ全土、および地の果てにまで、私の証人となります」(使徒の働き1章8節)。
- クリスチャンとは伝道する人、それを使命として生きる人である。それは、またイエス様が言われた言葉に合致する。即ち、「なくなる食物のためではなく、いつまでも保ち、永遠の命にいたる食物のために働きなさい。それこそ、人の子があなたがたに与えるものです」(ヨハネ6章27節)と。
- この地上で、ただ人に良いことをしてあげるためではなく、人々に、永遠の命を知らせ、届けることが私たちクリスチャンの使命である。
- 勿論、先週も申し上げたように、「伝道」と言うより、上述の使徒の1章8節にあるように、「キリストの証人」となることが大切である。即ち、
 1. イエス様が、私にしてくださったことをありのまま、シェアすること。
 2. それを通して、人々にイエス様がどんな方であるかをお伝えすることである。
 3. これがクリスチャンの使命である。
- その意味で、誰でもできることであるはずである。しかし、これが意外にも、余りなされていない。使命を忘れ、自分がクリスチャンであることで満足してしまっているのである。
- なぜか？ その一つの大きな理由は「恐れ」である。「恐れ」こそが、私たちをして、使命に生きることから離し、それを忘れさせ、全く無関心にさせるのである。
- この「恐れ」のテーマを考えると、次女の宣子エスターが、数年前に中国で短期宣教として、上海に行き、そこで、ほんの数週間であっが、重度のハンディをもった孤児院で奉仕した直後に彼女と会話をした時のことを思い出す。彼女は、そこに居る間に、そのような場所で、もっと長い期間、あるいは、生涯をかけて奉仕することも、心の中をよぎったようであった。でも、それを考えながら、すぐに「イエス」と言えない自分の中を見ながら彼女は言った。「お父さん、結局、私たちは、何をすることも、多くのとき『恐れ』に邪魔されているんだよね」と。
- 「恐れ」と反対の言葉が「勇気」である。反対というより、「恐れ」と戦って生きるために神様が私たちに与えられたものが「勇気」である。「恐れ」に打ち勝つためには、「勇気」が必要である。
- 勇気を持つことの重要性は、色々なところで言われている。
 1. 記憶が正しければ、小学校の5年生のときだったと思うが、国語の教科書の冒頭に載せられていた格言のような言葉を忘れることができない。それは、「勇気が逃げたら、すべてのものが君から逃げていく」という言葉であった。「勇気のない人生には何も期待できない」という意味である。

2. 有名な逸話であるが、英国の名相ウィンストン・チャーチルがある大学の卒業式の式辞を述べるためにメインスピーカーとして招かれたときに言った。「あなたが財産を失うことは小さいことである。あなたが名誉を失うことは大きいことである。しかし、あなたが勇気を失うとき、それはすべてを失うことである」と。
- そして、「恐れなくて、勇気をもって生きる」ことの重要性の最も大きな理由は、聖書がそれを繰り返して、私たちに伝えているからである。
 1. 旧・新両約聖書に亘って、神様から私たちへの励ましの言葉として、幾度も「恐れてはならない」という言葉が記されている。
 - (1) その数はある方の計算によると 366 回と言われるが、
 - (2) どうも、そこまで行かない、150 回程度だとも聞いている。それにしても、大変な数である。
 - (3) 今日の聖書の箇所ヨシュア記 1 章 1－9 節もその一つである。特に 6、7、9 節。
 2. イエス様も言われた。「あなた方は世にあっては艱難があります。しかし、勇敢でありなさい。私はすでに世に勝ったのです」(ヨハネ 16:33)と。
- さて、今日は 1 月 14 日、2018 年という「新しい地に足を踏み入れた」ばかりである。その私たちに、神様は、ヨシュアに対してと同じように、「恐れなくて、勇気をもって生きよ。勇気をもって、私があなたに与えた使命を果たせ」と語っておられるのである。
- 今朝は、特に、ヨシュアが、I、何を恐れたのか、また、そのヨシュアに、神様は、「恐れなくて、勇気をもって生きる」ように、どのような励まし、アドバイスを与えたかをみたい。

本 論

I. ヨシュアはここで、一体何を恐れていたのだろうか？

A. 彼の第一の恐れは、「未知に対する不安」からの恐れであった。

1. それは、第一に、**モーセのいない未知の人生**であった。
 - (1) ヨシュアは今まで、偉大な国民的指導者モーセの従者として生きてきた。しかし、そのモーセが死んでしまったのである。
 - (2) ヨシュアも、イスラエル国民も、モーセと共に過去 40 年間生きてきたのである。苦楽を共にして来たのである。様々な試練を乗り越えて来たのである。それ故、彼のいない人生、彼のいないイスラエルは考えられない、想像がつかないことであった。
 - (3) モーセはいつもヨシュアと、イスラエルの人々と共にいたのである。しかし、そのモーセが、今はもういないのである。
 - (4) モーセのいない人生、これからの日々は、彼にとってすべて未知の人生、世界であった。
 - (5) 私たちも、しばしばそのような未知の世界への不安と恐れを持つ。今まであてにして生きてきた人、あてにしてきた物が目の前からなくなってしまうときの恐れである。
2. ヨシュアにとってのもう一つの未知は、これから愈々ヨルダン川をわたって入って行こうとする**カナンという土地もまた未知の地**であった。
 - (1) そこは、「乳と蜜が流れる」と言われる豊穡な土地であり、確かに神様が私たちのために約束してくださった地ではあるが、
 - (2) ヨシュアにとっても、イスラエル国民にとっても、少しの情報以外は、全く未知未踏の土地であった。
 - (3) 私たちもみな、人生において、信仰生活において、このような今までまだしたことのない、経験のない「未知」の仕事や、使命を果たすように挑戦されることがある。その時、皆、怖いのである。

B. ヨシュアの恐れは、第二に、その仕事、「使命の膨大さから来る不安と恐れ」であった。

1. 即ち、先のポイントで触れたように、ヨシュアの託された使命は、偉大な指導者モーセ無しで、しかも、未踏未知の世界に対するものであっただけでなく、膨大なものであった。
2. 即ち、ヨシュアが神様から託された使命は：

- (1)何百万にも及ぶとも言われる、イスラエル国民を、ヨルダン川を渡らせること、
 - (2)イスラエル民族より遥かに民族として、即ち、武力的にも、組織的にも、文明・文化的にもすぐれている先住民族の住むカナンの地に入り込んで、そこを占拠し、自らの国民の占住地とすることであった。更には、
 - (3)レバノンからユーフラテスにまで及ぶ膨大な土地を占拠するという使命であった。それは、最近リーダーになったばかりのヨシュアにとっては、荷が余りにも大きかった。
3. それは、フットボールに警えるなら、練習では投げさせてもらってはいたが、まだ実際のゲームで一回も、或いはほとんどプレーをしたことのなかったバックアップ・クォーター・バック(QB)が、スーパーボール直前に、メインでかつ史上最優秀といわれるQB(トム・ブレイディーのような)が、怪我をして突然投げられなくなったので、急遽、スーパーボールという最重要ゲームでプレーをするように命じられたとき以上の荷である。
 4. 神様は、そのように、私たちにもまた、私たちの家族(夫、妻、子供たち)、親族、友人たち、更には、日本中、世界中の人々を、信仰に導くという、自分では到底できないと思われる大きな使命を負わせようとしておられるのである。

C. ヨシュアの恐れは、第三に、「失敗するのではないか」という恐れであった。

1. 自分に果たしてできるか。やって失敗したらどうするのかと言う心配である。
2. 沢山の人がこの「失敗」を恐れるのは：
 - (1)その時に、みなの前で恥をかくなのがいやだからと言うプライドから来ている。
 - (2)そのときに自分が傷つき、自分に失望し、自信を失くすのがいやだから、怖いから
 - (3)そのときに、期待してくれた周りの人ががっかりするのを見るのがつらいから
 - (4)その時に、周囲の人々に迷惑をかけることになるのがいやだから等々の理由である。
3. 「失敗は成功の母」と言うが、誰だって、失敗は嫌いである。だから恐れるのである。しかし、失敗しないで成功した人の方が珍しいのである。
4. あの発明王として有名なエジソンは、電球を発明するまでに1万回失敗したと言われる。彼は、失敗に着いてこのように言った。「私は失敗したことがない。ただ、1万通りの、うまく行かない方法を見つけただけだ」と。

D. これらは皆私たちが持っている恐れである。

1. 人間として当然の恐れである。恐れて当然である。
2. しかし、神様は、ヨシュアに言われたと同じように、私たちにも「恐れてはならない。おのいてはならない。勇気を出しなさい。雄々しくありなさい」と言われるのである。

II. 神様は、ここで、ヨシュアに、恐れなくて勇気をもって、使命に生きるための三つのアドバイスをくださった。

A. 第一は、実際に神に従い、信頼して、使命の未知を、勇気をもって歩んだ先輩たちの「証し」の中に神様の確かさを見ることである。

1. 神様はヨシュアに言われた。5節「私は、モーセとともにいたように、あなたと共にいよう」と。
2. モーセの生涯は、神様の約束が必ず果たされることの証しであった。神様の愛と真実と力がどんなものであるかの証し、証明であった。
3. それは、歴史であり、実際にあったことである。即ち、事実である。単なる「学説」や「考え方」「理想論ではなかった」。
4. これ以上の力はない。神様は歴史の現実であり、信仰は現実の世界のことである。
5. ヨシュアは、この危機に、もう一度、このことを思い出さなければならなかった。神が、この40年の間、モーセの生涯の中に、モーセを通してイスラエル民族の中に実際に何をなされたのかをもう一度思いだし、そこに神を見、神に信頼し、従う必要があった。
6. 私たちも、またこの神の国に実際に起こった事実の証しからもっともっと学ばなければならない。私たちは：
 - (1)聖書を見ると、モーセだけでなく、アブラハムから、ヨセフから、ダビデから、ダニエルから、ヨブから、・・・と沢山の先達の証しから学ぶことができる。

- (2)それだけではない。初代教会から今日に至るまで、キリスト教の歴史の中に生きた沢山の信仰の先輩達が残した証しに目を留めるべきである。
- (3)彼らの生涯の中に神様がどう言うお方で、何をして下さるかの確信を見出すべきである。
- (4)その意味で、信仰の先駆者たちの伝記をもっと読んで欲しい。例えば、ハドソン・テラー、ジョージ・ミューラー、ウィリアム・カーレーなど
- (5)勿論、そのような有名な信仰者だけでなく、身近にいる信仰の先輩たちの証しからもそのような力と励ましを頂くことができる。
- (6)ヘブル人への手紙の記者も、12章1節で、「私たちも、このように多くの証人に囲まれているのだから」と言って、信徒達を励ましている。

B. 第二は、神の約束を信頼することである。

- 1. 3節を見たい。「あなたがたが足の裏で踏む所はことごとく、私がモーセに約束した通り、あなたがたに与えている」と神様はヨシュアに「約束」を再確認して言われたのである。
- 2. ここで、日本語訳では、「与えている」となっている。これは正しい訳である。
 - (1) NIVは残念ながら“I will give you”と単純な未来形で訳している。文法的には可能な訳であるが、NRSVのように“I have given you”と訳す方がより良い訳だと信じる。
 - (2)なぜなら、神様の約束は、人間の約束のように将来そうなるだろうという不確かさがそこには全くない。
 - (3)神様の約束は、時間と空間を越えた神様の側では、既に成就した約束であるからである。
 - (4)神様の約束は、本当にそうなるかどうか分からない、或いは、「一生懸命するから、多分大丈夫だと思うよ」と言うようなどこか不確かな、「人の約束」とは全く違っている。
 - (5)すでに、成就していると言えるほど、不確かさの無い「確実」なものなのである。
- 3. だから神様の約束を信じるとは、イエス様が言われたように、まだもらっていなくても、まだ見ていなくても、「すでに得た」もの、「もうもらったかのように」信じることである。
- 4. だから、神様の約束を信じる者は失敗を恐れない。なぜなら、たとえ失敗しても、それですべてが終わったと思わないからであり、最後は、神様の約束通りになることを信仰によって知っているからである。
- 5. 恐れず、勇気をもって使命に生きるためには、このように神様の約束の成就を信じて疑わない信仰が必要である。

C. 第三に、神の言葉と共に生きることである。

- 1. 7-8節を見たい。特に、次の二箇所、「命じたすべての律法を守り行え」「律法の書をあなたの口から離さず、昼も夜もそれを口ずさまなければならない」に目を留めたい。
- 2. それは、第一に、実際生活の中で聖書に書かれている言葉を「守る」こと、「従う」ことである。
 - (1)聖書は TESTAMENT と言われるように「神と人との契約書」である。
 - (2)それゆえ、神様から一方的に何かしてもらうことを期待するのではなく、
 - (3)聖書には、神様が私たちに下さる約束や祝福と共に、私たちの側ですべきこともたくさん書かれている。
 - (4)例えば、「神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば・・・」である。
 - (5)しかも、自分にとって都合の良い、励まされるような言葉は心に留めるが、都合が悪いものは、無視すると言うようなセレクトィヴで、ピッキーというか、選り好みをしてのみ言葉に対する姿勢を、キッパリと止めなければならない。
 - (6)だから神はヨシュアに言われた。「すべての律法を守り行え」と。
- 3. 第二に、生活の中で、もっともっと聖書の言葉に親しまなければならない。具体的には：
 - (1)「すべて」とあるので、とにかくもっと聖書を読みたい。何が書いてあるかを知るために。
 - (2)「昼も夜もこれを口ずさむ」とあるように、それを味わう時間、思い出す時間、暗記・暗誦する時間を取りたい。

- (3) 更には、聖書を勉強する時間を取りたい。教会の集会で、牧師の指導のもとで、あるいは個人で、グループで、必要なら参考書のような資料も使ってでも行いたい。
- (4) 家で、夫婦で、家族で、週日に聖書を一緒に開く時間(短くても、たとい2-3分、5-10分でも、15分でも)をもちたい。家の中に聖書の言葉を掛けることも良い。

結 論

- クリスマスは、使命感をもって生きる人である。そして、使命感をもって生きる人は、目の輝きが違う。それこそが、クリスマスを輝かせるのである。正に与えることは受けることに勝るのである。
- ヨシュアは、神様に使命を与えられた。それは、人間的には「恐れ」て「私にはできません」と言って尻込みをしても当然というような困難かつ大きな使命であった。
- しかし、神様は、恐れてはならない。怖がってはならない。勇気を出して前進しなさい。私のために、神の国の建設、発展のために使命を果たしなさい。と励まされた。
- 私たちは、みな、クリスマスとして、家族から始まって、世界に至る人々に、宣教、伝道する使命が与えられている。
- 恐れることなく、勇気を出して、その使命を果たしたい。そのために：
 1. 信仰の先達者たちの証しに目を留め、そこから教えられ、励ましを受けたい。
 2. 神の約束は必ず成就すると信じる。
 3. 神のお言葉を一杯聞き、読み、味わい、そして、実践者になる：聖書をもっと読み、味わい、心と頭に蓄え、学び、親しみ、実践する。
- この新しい年、2018年、自分のため、教会のため、家族のため、親族のため、友人達のため、コミュニティーのため、世界のために、恐れなくて、勇気をもって、神の国建設を目標に前進したい。